

平成 25 年度医師体験セミナー（中学生編）

平成 25 年 8 月 24 日、高松赤十字病院において中学生を対象にした医師体験セミナーを開催しました。昨年に引き続き開催されたこのセミナーには応募総数 78 名とかなり人気が集出し、抽選で選ばれた中学生 22 名が外科・内科の総合的な体験をしました。

開会のあいさつでは、笠木院長が自身の医師になるまでの経緯を交えながら、学生たちに医師の仕事について話しました。「医師の仕事は辛く厳しいものであるが、現役の医師に実際に辞めたいか、転職したいかと聞いてみると、ほとんどの人はＮｏと言うはずだ。それは弱っているものを助ける、社会に貢献しているということへの自負心が私達医師のモチベーションになっている。」と語りかけました。「また医師になるためには『優しい気持ち』と『優れた人格』が必要である。人道・博愛の精神をもって医師を目指してほしい」という激励の言葉とともにオープニングとなりました。

◆手術室の見学・手術支援ロボット「ダ・ヴィンチＳｉ」の見学

（担当：心臓血管外科部長 西村／泌尿器科医師 泉／臨床工学技士 光家、別府／手術室看護師 貞廣、溝渕）

本館の手術室に移動し実際の手術で使用するガウン、マスク、帽子、靴カバーを装着しました。「手術室の中を清潔に保つ必要があるため必要なことなんです」と手術室看護師からの説明があり、生徒たちは緊張と希望に胸を膨らませていました。

まずはこの 7 月に新しく導入された手術支援ロボット「ダ・ヴィンチＳｉ」の見学です。



遠隔操作によりロボットのアームを動かすことで、従来の腹腔鏡手術よりもより細かく正確な作業が可能になるとの説明がありました。また高画質のカメラも搭載されており、3D画像で見ること、よりの確な手術が可能になるとのことでした。「ダ・ヴィンチＳｉ」を実際に使った映像を見ながらの解説もあり、生徒たちは「最初は生々しい映像だったけど、解説を聞きながらだったから大丈夫だった」と明るい表情で答えてくれました。

次に別の手術室で「手術」の全体的な解説をしてもらいました。手術ベッドの上に心臓の模型を置き、拡大鏡で観察しました。カメラ付きの拡大鏡で見ること、執刀医が見ている映像を手術に立ち会っている全員が共有できるようになっていました。「何時間もかかる手術中は、何も食べたり飲んだりできないのですか」との質問に、「患者さんの状態にもよるけど、8～10時間くらい集中して手術をし続けることもよくある。医師は学力や精神面だけじゃなくて体力がとても必要な仕事なんだ」と答えていました。

◆鶏肉の切開・縫合

(担当：内科医師 高橋／皮膚科医師 木戸／消化器外科医師／三木、南)



電気メスを使って鶏肉の切開を行った後、実際の縫い針を使った縫合を行いました。電気メスを鶏肉の表面にあてるとじりじりと音を立てながら綺麗に切開されます。鶏肉が鮮やかに切れていくのを体験した生徒たちは「少し焦る匂いがするけど、すごく楽しい」と歓声をあげていました。さらに実際の縫い

針と摂子を使って縫合し、器用に糸を結んでいました。担当した医師からは「のみこみが早いね」「素質があるよ」と褒められていました。縫合が難しかったという声が多い一方で、アンケートでは最も人気の高い体験となりました。

手術室から満面の笑みを浮かべながら出てきた生徒のみんなは、満足感とともに「楽しかった～！」と興奮している様子でした。

◆眼科検査

(担当：眼科医師 齋藤了一、齋藤あゆみ)

眼科外来で行われた「眼科検査」では、まず眼球の模型を見せながら、一般的な眼の病気や治療についておおまかに解説しました。検査をしやすいするために検査用点眼薬を差したり、特殊な光をあてたりと工夫をしながら検査していることを学びました。またその後、実際に細隙灯顕微鏡を通して学生同士がお互いの眼を観察しあう体験実習をしました。拡大して観察すると、「眼の中がきれいに見えた」と目を輝かせて話していました。



◆病院食の試食

(担当：管理栄養士 高本)

中高生が実際に入院した時の病院食を試食しました。管理栄養士によると食材の彩りだけではなく、食器の色や質感にまでこだわり、家庭的で温かみのある食事提供を心がけているそうです。普段の食生活を自ら振り返り、今こそ夢の実現のために健康的な食事で健



全な体作りが大切であると話がありました。およそ 1000 キロカロリーの昼食をほとんどの生徒が完食し、大満足な表情で食堂を後にしました。満腹で眠くなった生徒たちですが、声をかけると午後からも頑張りますと元気よく答えてくれました。

◆診察の基本と聴診・血圧測定

（担当：内科医師 高橋／看護師長 田岡）

最初に診療の基本的な話として医療面接や診察方法について説明がありました。また保険診療については簡単に 3 割負担であれば、10 万円の診察を受けたら 3 万円を支払って、残り 7 万円を国が負担してくれるという説明にみんな納得しているようでした。医師の診察に関する基礎的な事項をいくつか紹介した後、実際に聴診器や血圧計を使う体験が行われました。患者役の引率スタッフに聴診器をあてて鼓動を確かめたり、生徒同士がお互いの血圧を測ったりと、内科の医師になった気分で診察の体験をしました。聴診器で音を確認することができた瞬間に「ざーっていう砂嵐みたいな音の奥でドクドクって聞こえた！」と驚きの表情がうかがえました。

◆静脈血採取

（担当：研修医 脇谷、古本／看護係長 古賀）

腕の模型の中に血液色の液体を流し、そこから注射器で採血をします。静脈を採血するために「駆血帯」と呼ばれるゴムひもを模型の腕の上部に巻きつけ、血管を浮き上がらせてから針を刺して吸引します。採血が終わったら駆血帯を外して止血するという流れでした。実際に医師が採血の練習をするのと同じ手順で体験ができたため、最も「リアルな」体験ができたのではないかと思います。



◆スキンモデルによる切開・縫合体験

(担当：心臓血管外科医師 西村、川村／研修医 鈴木)

人間の肌と同じような材質でできた模型(＝スキンモデル)にメスで切開を入れた後、針と糸を使って縫合を行いました。はさみの形をした器具で湾曲した針を持ち、糸をつけてからスキンモデルを縫います。最後に両手で糸を持って器用に結んでいく作業を行いました。午前中の鶏肉を使った縫合よりも難しかったとの声が多かったようですが、徐々にスムーズに作業をこなせるようになり、「医学生よりも呑み込みが早いね」と担当の医師も驚いていました。



◆研修医の一日

(担当：研修医 古本)

研修医の立場から、医師が1日の中でどのような仕事をしているかを話してもらいました。医師のカンファレンスに参加したり、挿管実習をしたりという話だけでなく、災害救護にも参加するという話がありました。医師の仕事は本当に「やりがいのある仕事」であり10年後に是非当院の研修医として戻ってきてほしいとの言葉で締めくくられました。

◆シンポジウム

(担当：内科医師 高橋 パネリスト：研修医 鈴木、古本、脇谷)



3人の現役研修医が「自分が医師になろうと思ったきっかけ」や「学生の時に頑張っていたこと」について赤裸々に語りました。やはり一番しんどかったことは大学に入るまでの勉強だったようですが、部活や友達との時間を大切にすることが勉強の助けになったとのことでした。パネリストの鈴木先生は、中学生の頃にそれほど勉強をしていたわけではなく、部活や生徒会に力を入れていたとのことでした。何かに一生懸命取り組むことで、それをやり遂げた時にぱっと勉強に切り替えることができたようです。「何も頑張っていない人は勉強も頑張れない気がするんです。何か自分の頑張れるものを1つ見つけてそれに夢中になってください。」とメッセージを送りました。

◆プログラム◆

9:25 ~ 9:35 病院長あいさつ

9:35 ~ 9:50 主旨説明・事務的説明

10:00 ~ 12:10 3グループのローテーションで体験

◎ 手術室・ダヴィンチ Si の見学

◎ 鶏肉の切開縫合

◎ 眼科的検査

12:15 ~ 13:05 病院食の試食・栄養に関するセミナー

13:20 ~ 15:00 3グループのローテーションで体験

◎ 診察の基本と聴診・血圧測定

◎ 静脈血採血

◎ スキンモデルによる切開縫合体験

15:10 ~ 15:25 研修医の1日

15:25 ~ 16:00 シンポジウム、質問コーナー

16:00 ~ 16:15 アンケート記入